

## 改訂 3 版補足情報－2019/11/5 更新

本書（第 1 刷）の掲載内容に以下の補足情報がございます。

### 第 7 日

P.140～P.141－「2 DNS サーバ／2.3 DNS サーバの構築／2.3.3 chroot マウントの処理－手順 3」

#### 【注意】

本項の「`setup-named-chroot.sh` スクリプトの実行」後（および、`named-chroot` サービス start 後）は、つまり、P.141 以降、`/var/named` は `/var/named/chroot` の下にマウントされるので、`/var/named/chroot/var/named` 下のファイル／ディレクトリは `/var/named` のファイル／ディレクトリと同一ファイル／ディレクトリとなる（同じ 1 つのものを参照）。

`/var/named/chroot` の下にマウントされるものは、「`/usr/libexec/setup-named-chroot.sh`」内で記述されている：

```
# it MUST be listed last. (/var/named contains /var/named/chroot)
```

```
ROOTDIR_MOUNT='/etc/localtime /etc/named /etc/pki/dnssec-keys /etc/named.root.key /etc/named.conf /etc/named.dnssec.keys /etc/named.rfc1912.zones /etc/rndc.conf /etc/rndc.key /etc/named.iscdlv.key /etc/protocols /etc/services /usr/lib64/bind /usr/lib/bind /run/named /var/named'
```

このマウント状況は以下の手順で確認できる。

- ・書籍 P.140 の「→注意：マウント処理スクリプトと `named-chroot` サービスの起動処理＝」の説明を確認
- ・`named` サービス (`named-chroot`) を停止して「`/var/named/chroot` 下のファイル、ディレクトリ」を確認
- ・`named` サービス群 (`named-chroot.service`、`named-chroot-setup.service`) の処理内容の確認  
`/usr/lib/systemd/system/named-chroot.service`、`/usr/lib/systemd/system/named-chroot-setup.service`  
(起動順序は、`named-chroot-setup.service`→`named-chroot.service`、の順)
- ・`named` サービス (`named-chroot`) を起動して「`/var/named/chroot` 下のファイル、ディレクトリ」確認

### 第 22 日

P.441～P.443－「1 メールサーバのセキュリティ強化と応用／1.4 その他／1.4.1 アンチウイルスソフト (ClamAV)」

#### 【注意】

現時点 (2019/11/5) では書籍記載の `ClamAV` パッケージは書籍記載の「`ClamAV` パッケージダウンロード URL」からはダウンロードできないが、以下の 2 つの方法で本項を利用できる。

## <1> 書籍バージョンのダウンロード

時間とともに、アプリケーションパッケージは更新され、自動的に旧バージョンパッケージはインターネットからのダウンロードが難しくなる。ClamAV パッケージも同様に、書籍のダウンロードサイトの山形大学のようなミラーサイト (Fedora Projects や CentOS のミラーサイト) では最新のバージョンのみ置かれていて、古いバージョンは削除される。

本家の ClamAV サイト (clamav-net) では旧バージョン (ソース) を保存しているが、Fedora Projects も通常、RedHat/CentOS ポーティングの旧バージョン (clamav\*.el7.\*.rpm) を保存している (<https://src.fedoraproject.org/rpms/clamav>)。

しかしながら、「clamav-0.99.2-13.el7」については残念ながら削除「DELETED」(State : deleted) となっている (<https://koji.fedoraproject.org/koji/buildinfo?buildID=1004169>)。

一方で、RedHat 7 (EPEL7) 系の Linux には未だ残っているところがある。例えば、Oracle Linux 7 (x86\_64) EPEL である ([https://yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL7/developer\\_EPEL/x86\\_64/](https://yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL7/developer_EPEL/x86_64/))。

現時点 (2019/11/5) ではこれを使うことができる。ここでもいずれは消えるかも知れないが。

なお、書籍 P.442 「備考」欄に記述の clamav (clamav-0.99.2) 関連パッケージの Oracle サイトでのファイル名は以下のようにになっている。

Oracle Linux 7 (x86\_64) EPEL サイト内に存在

- 1.clamav-filesystem-0.99.2-13.el7.noarch.rpm
- 2.clamav-data-0.99.2-13.el7.noarch.rpm
- 3.clamav-lib-0.99.2-13.el7.x86\_64.rpm
- 5.clamav-milter-systemd-0.99.2-13.el7.noarch.rpm
- 6.clamav-milter-0.99.2-13.el7.x86\_64.rpm
- 7.clamav-0.99.2-13.el7.x86\_64.rpm
- 8.clamav-server-0.99.2-13.el7.x86\_64.rpm
- 9.clamav-server-systemd-0.99.2-13.el7.noarch.rpm
- 10.clamav-update-0.99.2-13.el7.x86\_64.rpm

CentOS 7.4 DVD 内に存在

- 4.sendmail-milter-8.14.7-5.el7.x86\_64.rpm

## <2> 最新バージョンの適用

一方、CentOS-7/ClamAV の現時点でダウンロード可能な最新バージョン (clamav-0.101.4) では、clamav-server パッケージと clamav-server-systemd パッケージが clamd パッケージに統合され、clamav-milter-systemd パッケージも clamav-milter パッケージ内に統合された。

そして、名前も、「clamd」の systemd サービス名が「clamd@clamd.service」→「clamd@scan.service」に、その設定ファイルが「clamd.conf」→「scan.conf」に変わった。

設定は、clamd 設定を「scan.conf (旧 clamd.conf)」で、freshclam 設定を「freshclam.conf」で、milter 設

定を「clamav-milter.conf」で、内容的には書籍のように行うところはそのまま。

書籍の P.443 の 7 行目「・自動起動設定と起動」部分は以下のようなになる：

- ・自動起動設定と起動

	/usr/bin/freshclam	←最新のウイルスパターンに更新
(旧)	systemctl (re)start clamd@clamd.service	←旧 ClamAV デーモン起動
(新)	systemctl (re)start clamd@scan.service	←新 ClamAV デーモン起動
	systemctl (re)start clamav-milter.service	←ClamAV メールフィルタ起動
	systemctl restart sendmail.service	←sendmail 再起動

【備考】(OS 起動時の) 自動起動設定は以下のように行う。

```
systemctl enable clamd@scan[.service] (旧バージョンの場合は、clamd@clamd.service)
systemctl enable clamav-milter[.service]
```